

UR | 団地 | 再生 デザインコンペ 「緑とともに暮らす生活シーン」



昭和31年生まれの僕は、団地っ子だった。地方から東京に出てきた両親は、ともに30代、凄まじい倍率の抽選に当たり、憧れの公団に入居した。今思えば、とても狭かった3Kの家でも、完璧に快適だった。小学生の僕は、「テッキン」がとても誇らしく思えた。



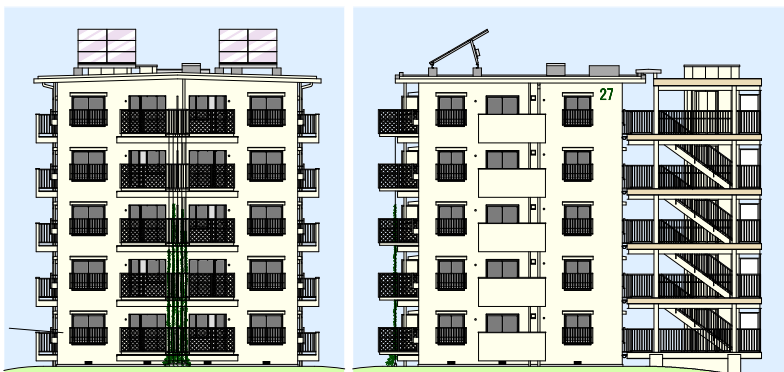
田舎育ちの両親は、植物がとても好きだった。真南を向いたベランダは、草花や野菜の植木鉢で溢れた。母は東京っ子の僕に、草花の名前だけでなく、挿し木で育てたアジサイの色の变化とか、スイセンとクロッカスの植え方の違いとかを、ひとつひとつ教えてくれた。僕は、アサガオの花を毎朝教え、ヘチマの棚を作り、山椒の葉でアゲハ蝶の幼虫を飼った。

僕が中学生の時、東京から地方都市に転勤した両親は、ここでも公団に入居し、高校生の時には別の公団の分譲住宅を買った。高台にある団地の5階は、部屋もバルコニーも広がったけれど、運動部の兄弟の山のような洗濯物もあったから、緑はだいぶ減った。手摺がほとんどコンクリートだったことも理由にしていたけれど、親もいちばん忙しい頃だ。



70代になった父母は、足腰も弱くなり、同じ団地の少し狭い1階に移った。水廻りを改装し、部屋の数は減ったけれど、二人暮らしなら十分な広さだと言う。暇になったこともあって、バルコニーは、またプランターの植物で一杯になった。父はオリヅランやジャコバサボテンを増やすのが好きだ。アロエやゴムノキの巨木もあるから、いつも置き場に苦心している。母はアジサイや山椒に水を遣る時に、ふと子供たちと過ごした日々を思い出すと言う。両親は、ともに80代になった。緑とともに暮らしながら、ここが終の棲家となる。

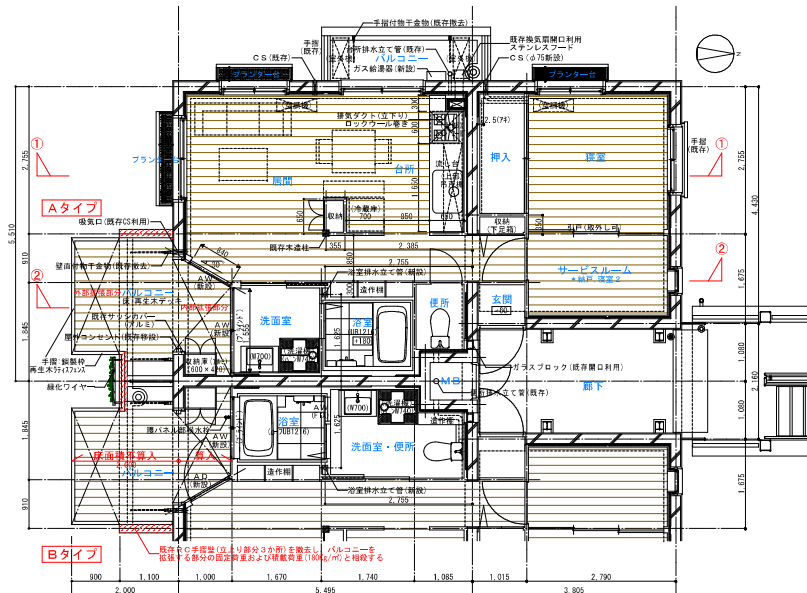
団地再生の改修は、「若い家族と高齢者を対象とした、緑とともに暮らす生活シーン」を提案します。



■南・東立面図 S:1/125

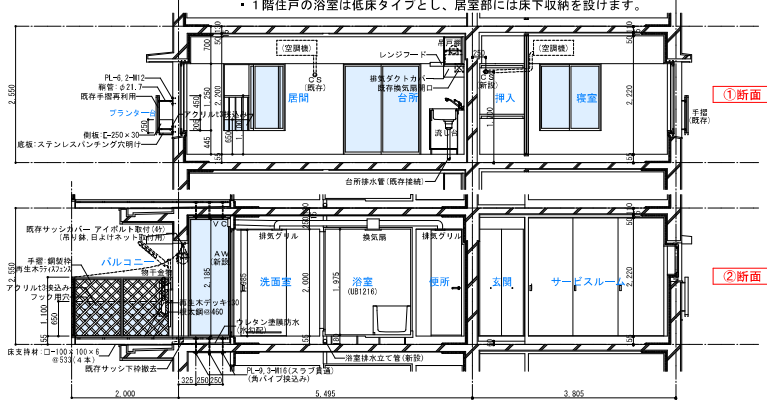
□色彩等外壁デザイン

- ・外壁はRC手摺、窓底とも既存EV機合わせのアイボリー色とし、鉄部も同色とします。(図面の彩色は資料写真からの推定による)
- ・バルコニーのラティスフェンス、窓手摺のプランター台、南面中央の緑化ワイヤーが、ガーデニング愛好家へのアピールとなります。
- ・「緑の回廊」のポイントとなるボックスタイプの住棟は、「緑の棟」として再生し、景観のアクセントとします。



■平面詳細図 S:1/50

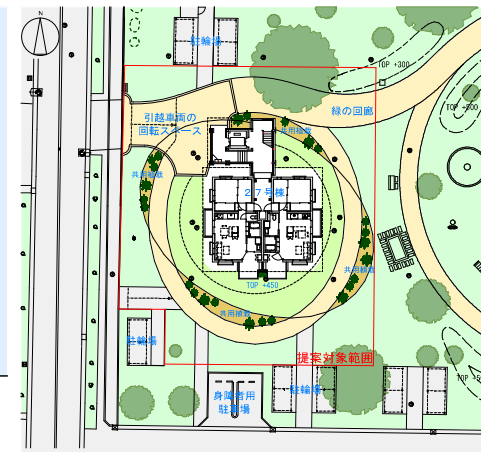
- ・建築基準法における床面積の増減はありません。(増築扱いにならない)
- ・床高は特記なき限り既存スラブレベル+155とします。(南側バルコニーとも)
- ・1階住戸の浴室は低床タイプとし、居室部には床下収納を設けます。



■断面詳細図 S:1/50

□屋外空間

- ・住棟からある程度の距離をおいて周囲できる小径(幅員2M)を設け、駐車場・駐輪場からの動線と繋ぎます。
- ・小径の内側はマウンド状に盛土し、芝張りします。(住棟足元廻りは砂利敷き)
- ・小径に沿って共用の植栽ゾーンを設け、大きくなりすぎた植物などを入居者が自由に植え込み、維持管理も協働で行う場所とします。
- ・共用植栽ゾーンでは、団地でのプランター栽培で入手に苦労する栽培土を提供し、不要になった土の捨て場も用意します。



■屋外平面図 S:1/300

00538